

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 豊島慶子姉

開 会 招 詞 詩篇24:7-10

* 賛 美 歌 6:1

われ かみ あめつち くにごに よろこ
我らのみ神は天地すべます、国々しまじま喜びたたえよ。 アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈祷書2 罪の告白①

かみ 神よ、わたしを ^{あわ}憐れんでください。 ^{おんいつく}御慈しみをもって。 ^{ふか}深い ^{おんあわ}御憐れみをもって、 ^{そむ}背きの ^{つみ}罪を ^さぬぐい去ってください。 ^{はは}わたしの ^{とが}咎を ^{あら}ことごとく ^{つみ}洗い、 ^{きよ}罪から ^{とが}清めてください。 ^うわたしは ^お咎のうちに ^お産み落とされ、 ^{はは}母が ^みわたしを ^{つみ}身ごもったときも、 ^{あら}わたしは ^{ゆき}罪のうちに ^{ゆき}あったのです。 ^{はは}わたしを ^{ゆき}洗ってください。 ^{はは}雪よりも ^{しろ}白くなるように。 ^{かみ}神よ、 ^{うち}わたしの ^{きよ}内に ^{ごころ}清い心 ^{そうぞう}を ^{あた}創造し、 ^{たし}新しく ^{れい}確かな ^{すく}霊を ^{よるこ}さずけてください。 ^{ふたた}救いの ^{あじ}喜び ^{じゆう}を ^{れい}再び ^{ささ}わたしに ^{くちびる}味わわせ、 ^{ひら}自由の ^{ささ}霊によって ^{くちびる}支えてください。 ^{くち}主よ、 ^{さんび}わたしの ^{うた}唇を開いてください。 ^{くち}この口は、 ^{さんび}あなたの ^{うた}賛美を ^{うた}歌います。 ^{くち}主イエス・キリストの ^{うた}御名によって。 ^{くち}アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、 ^{なにも}何者をも ^{かみ}神として ^なはならない。
2. あなたは ^{じぶん}自分の ^{きざ}ために ^{ぞう}刻んだ ^{つく}像を ^ふ造っては ^ふならない。 ^{つか}それに ^{つか}ひれ伏して ^{つか}はならない。 ^{つか}それに ^{つか}仕えて ^{つか}はならない。
3. あなたは、 ^{かみ}あなたの ^{しゆ}神、 ^な主の名を、 ^{とな}みだりに ^{しゆ}唱えて ^{しゆ}はならない。 ^{しゆ}主は、 ^なみ名を ^{とな}みだりに ^{もの}唱える ^{ぼつ}者を、 ^な罰しない ^なでは ^なおかぬ。
4. ^{あんそくにち}安息日 ^{せい}をおぼえて、 ^{せい}これを ^{せい}聖と ^{せい}せよ。
5. あなたの ^{ちち}父と ^{はは}母を ^{うやま}敬え。
6. あなたは ^{ころ}殺して ^{ころ}はならない。
7. あなたは ^{かんいん}姦淫して ^{かんいん}はならない。
8. あなたは ^{ぬす}盗んで ^{ぬす}はならない。
9. あなたは ^{りんじん}隣人 ^{ぎしやう}について ^{ぎしやう}偽証して ^{ぎしやう}はならない。
10. あなたは ^{りんじん}隣人の ^{いえ}家を ^{いえ}むさぼって ^{いえ}はならない。 ^{りんじん}隣人の ^{つま}妻、 ^{りんじん}また ^{りんじん}すべて ^{りんじん}隣人の ^{りんじん}ものを ^{りんじん}むさぼって ^{りんじん}はならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 44:1

1. ^{やまべ}山辺に ^む向かい ^{われ}て我 ^め目を ^あ上ぐ、 ^{たす}助けは ^{たす}いずか ^{たす}たより ^{きたる}きたるか
^{あめつち}天地の ^み御神より ^{きた}助け ^{きた}ぞ我 ^{きた}に ^{きた}来る。 ^{きた}アーメン

公 同 の 祈 禱 6 ニケア信条

われ 我らは、 ^{ゆい}唯一の ^{ぜん}全能の ^う神、 ^{かみ}天と ^{てん}地と、 ^ちすべて ^み見える ^みものと ^み見えざる ^みものとの ^み創造者 ^みを ^み信ず。

われ 我らは、 ^{ゆい}唯一の ^{しゆ}主、 ^{かみ}神の ^{ひと}独り子、 ^いイエス・キリスト ^{きり}を ^{しん}信ず。 ^{しん}主は、 ^{しん}あらゆる ^{しん}世の ^{しん}さきに ^{しん}み父 ^{しん}より ^{しん}生まれ、 ^{しん}神より ^{しん}の神、 ^{しん}光より ^{しん}の光、 ^{しん}造られず ^{しん}して ^{しん}生まれ、 ^{しん}み父 ^{しん}と ^{しん}同一 ^{しん}の本質 ^{しん}に ^{しん}います ^{しん}真の ^{しん}神。 ^{しん}万物 ^{しん}は ^{しん}彼 ^{しん}により ^{しん}て ^{しん}造 ^{しん}られた。 ^{しん}主は、 ^{しん}我 ^{しん}ら ^{しん}人間 ^{しん}のため、 ^{しん}我 ^{しん}らの ^{しん}救 ^{しん}いの ^{しん}ために ^{しん}天 ^{しん}より ^{しん}降り、 ^{しん}聖霊 ^{しん}によって ^{しん}処女 ^{しん}マリヤ ^{しん}より ^{しん}受肉 ^{しん}して ^{しん}人 ^{しん}となり、 ^{しん}我 ^{しん}らの ^{しん}ために、 ^{しん}ポンテオ・ピラト ^{しん}のもと ^{しん}に ^{しん}十字架 ^{しん}につけられ、 ^{しん}苦 ^{しん}しみを ^{しん}受け、 ^{しん}葬

られ、聖書に従って三日目によみがえり、天に昇り、み父の右に座し、生ける者と死ねる者とを審くために、栄光をおびて再び来たりたもう。その御国は終わることがない。

我らは、生命の与え主にして、主なる聖霊を信ず。聖霊はみ父と御子とより出で、み父と御子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語られたもう。我らは、唯一の聖なる公同の使徒的教会を信ず。我らは、罪の赦しのための、唯一の洗礼を告白す。我らは、死人のよみがえりと、来たるべき世の命とを待ち望む。 アーメン。

献 金 (黒)・(赤) 神学校献金日 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

子どもプログラム

聖 書 朗 読 詩編 6 2 編 6 - 9 節(旧約 p. 895)

コロサイの信徒への手紙 1 章 1-8 節(新約 p. 368)

説 教・祈祷 「聞く人、育つ人」 杉山昌樹牧師

* 賛 美 歌 42:1, 2

1. み恵み豊けき 主の手に引かれて、この世の旅路を 歩むぞうれしき。
(おりかえし) 妙なる御恵み日に日に受けつつ、み跡を行くこそよなき幸なれ。
寂しき野辺にも、 賑わう里にも、主ともにいまして 我をぞ導く。(おりかえし)

アーメン

* 主 の 祈 り 祈祷書 1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 6 6

世をこぞりて、ほめたたえよみ さかえつきせぬ、あまつかみを。 アーメン

* 祝 祷

後 奏 (黙祷)

報 告 門脇陽子長老 (司会・受付 次週: 雨宮信長老)

本日 受付 1 階: 藤井牧子・大日南隆夫執事 2 階: 大日南信也執事 / ZOOM ホスト・録音: 雨宮信

次週 受付 1 階: 佐藤紀子・加藤良明執事 2 階: 古澤迪子執事 / ZOOM ホスト・録音: 森永翔馬

※ 2 グループ制により、長老も 1 階と 2 階に一名ずつ加わります。

コロサイ1:1-8「聞く人、成長する人」

神の話をしよう

今日から新たにコロサイの信徒への手紙を読み始めます。パウロはここでいきなりグイッと切り出しています。それは、信仰の話をしようじゃないか、という語りだしです。伝道者が教会に宛てた手紙で信仰の話をするのは、当たり前と言えども当たり前です。しかし、パウロは最初から、神様のお働きを確認しているのです。それは例えば、兄弟という言葉において既に現れています。使徒パウロと兄弟テモテ、とあります。さらに、キリストに結ばれている忠実な兄弟たちとあります。この結ばれてという言葉は「キリストの内にある」とも訳せます。キリストにしっかりととらえられているのです。その意味で、どちらも兄弟です。パウロは使徒で、コロサイの人々は信徒です。しかし、立ち位置は同じだ、というのです。どちらも、兄弟同士だ、神様の子だ、というのです。もちろん、コロサイの教会にも女性は多くいたでしょうし、パウロの同労者にも女性がたくさんいますから、正確には兄弟姉妹です。しかし、いずれにしても、ここで明らかなのは手紙の書き手も受けても、同じ信仰で結ばれているのだ、すでに、神様のものとして、取り分けられたもの、聖別されたものだということです。何しろこのところの書き出しは、「神さまの御心によって」です。パウロを動かしているのも、コロサイの人々を動かしているのも、この神様の御心だ、と言いたいのです。そこで、もう、我々は御心の中にいわばどっぴりとつかっているのだから、まず神さまが私たちをどうしようとしておられるのか、それを確かめていこう、というのです。

エパfrasによって

このように語りますと、初めて教会に来られた方、まだ、信仰を持っておられない方は、なんだ、それじゃあ、俺たちは関係ないのか、と思われるかもしれませんが、けれども、ここでは、信仰には始まりがあって、その始まりから、神様が何をされるのかが描かれているのです。その意味では、今すでに信仰を持っておられる方も、これから信仰をもとうとする方も、どちらも、自分の身の上になが起きてきているのか、あるいは、これから起きていくのか、この所から知っていくことができるのです。信仰するとはこういうことだ、神様の子になるとはこういうことだ、という中身がここで語られるのです。そして、コロサイの人たちにとっての始まりは、一人の伝道者によって伝えられた良い知らせ、福音と私たちは言っていますが、その福音を聞くことでした。ちなみに、このコロサイという名前は町の名前です。現在のトルコの内陸部分、現在のイラクやイスラエルなど東の方からギリシアやローマに向かう大きな通商路、街道沿いにあって、毛織物の産地であり、異教の女神崇拜が盛んであったようです。近所の町としては、ラオディキアやヒエラポリスというところにも教会がありました。このあたりで言えば川越街道沿いにちょうど教会が並んでいますけれども、まさに同じような構図です。今日の聖書の7節にエパfrasという人が登場します。このコロサイの町出身であったようです。彼はパウロと一緒に働いている人です。同じ町出身だけれども、一足先に信仰を持ったのです。そして、ある時、故郷に帰って福音を語ったのです。そこから、このコロサイの教会が始まっていきました。

恵みと平和

その時、コロサイの人たちが福音を受け入れたときに始まって、今もそのまま続いているものがあると言います。それは、パウロが最初に祈っている「恵みと平和」です。言うまでもないことですが、この場合には、神様から恵みが与えられる、あるいはずっと与えられ続けている、という意味です。では神様からの恵みとは何かですが、それは神様からの赦しです。この赦し、という言葉もまた、キリスト教に独特です。そして、これがわかるとわからないでは大違いな言葉です。そこで、今日はちょっとこのことに触れたいのです。これを少し言い換えてみると、神様のものにしてもらえんと言っているのではないかと私は考えています。神様のことを全く知らない、分からない、関係ない、そんな状態から、神様と付き合うことが赦されて、神様との間に何のわだかまりもない、神様のとあいだが、ツーカーの仲になる、遠慮がない、こんなこと言ったら怒られるかな、と言って心配しなくていい、状態です。何といっても神様が味方ですから、安心です。そして、ここで言う平和とは、その意味です。神様が味方だ、という恵まれた状態の中で全く安心だという状態です。それがもう始まっているし、これからも

ずっと続くのだ、とパウロは最初に確認しているのです。

なぜ感謝するか

そして、このことがわかりますと、パウロが3節で感謝しているその意味が分かります。神様がコロサイの人たちの心を作り替えて下さって神様の恵みの中に入れて下さって、神様の平和の中にとどまっていることができています、これがすでに感謝です。けれども、そればかりではなく、もっとすごいことが、コロサイの人たちの間で始まっている、そのことも感謝しているのです。そのようなコロサイの人たちの中で始まっていること、それは、彼らのあり方が変わっている、日々変わっているという事実です。では、そのような意味でコロサイの人たちの何が変わったのでしょうか。それは、4節にあります言葉で明かです。ここでは、まずコロサイの人たちが、キリスト・イエスにおいて、そのお働きの中にあって持っている信仰、ということが言われます。イエス様との間に深いかかわりがあって、そのかかわりの中で人間としてのあり方が変わるのです。どう変わるとかと言いますと、そこにあります通りですが「すべての聖なるものたちに対して抱いている愛」です。これはおそらく、他の教会を援助するという具体的な現れとして出てきた事柄だと思われます。パウロはこの時代、エルサレム教会への献金を呼び掛けていましたから、そのことが念頭にあったのかもしれません。しかし、それだけではありません。忘れていけないのは、パウロはコリントの信徒への手紙1で、様々な聖霊の賜物を、取り上げた後で、最も大いなるもの、最後まで残るものは愛だ、と言っていることです。信仰の中で、賜物として、あなたたちに神様と人への愛が与えられている、これを私は喜ぶ、というのです。そして、この愛はコロサイの人たちが、自分で造り出して物では全くなく、むしろ、神様という源から出てくるものだ、というのが続く5、6節で言われていることです。

動かしている神

それは、というのは、コロサイの人たちが持つに至った愛です。その愛は、天に源を持っているのです。「あなたがたのために天に蓄えられている希望に基づく」とはっきり書かれています。ここで新しい言葉が出てきました。「希望」です。ここでは、この「希望」が「福音」と結び付けられています。しかも、それは、コロサイの人たちが、エパfrasから、「福音」を聞いたときから始まっていたというのです。福音についてはすでにお話ししました平和と同じです。神様がわたしたちの味方であることです。この事実を聞いたときから、コロサイの人たちは、希望をもって生きようになったのです。そしてそれは人間が勝手に持っている希望ではなくて、天に蓄えられているのです。無限にあり続けるのです。神様からの平和が天からずっとコロサイの人たちに向かって注がれているので、この希望は尽きないのです。そして、この希望に支えられているから、コロサイの人たちは、愛を持つことができるのです。もっと言えば、人間が持つ愛の源は、神様からの希望です。神様の支えがあるところに、希望が生まれ、希望があるところに愛が生まれてくるのです。

信仰の始まり

そして、このような福音の働きは世界中で始まっている、との言葉が6節で語られています。その意味では、特別なことではない、というのです。イエス様を信じる人がいるところであればどこでも、この愛が働きだすのです。それは今日この所でも全く同じです。そして、実は今日どうしても聞きたい言葉が、信仰の原点がこの6節において語られています。それは「神の恵みを聞いて真に悟った日から」。信仰の誕生日です。神の恵みはすでにお話ししました。くどいようですがけれども、神様が味方になってくれている、という知らせです。福音と言ってもよいのです。その知らせを聞いて、真に悟るのです。そして真に悟るとは、イエス様が何をして下さったのかを、理解することです。イエス様が、私たちの身代わりとなって罪を負って下さり、私たちが罪の罰から解放され、新しい命に生きるものとされることができる、とはっきりと理解して、イエス様と一緒に生きようになった時、私たちの中で新しく神様の業が始まっていくのです。

真理を聞いたときから

そこで何が起きるのか、と言いますと、6節の最後に「実を結んで成長していく」とある通りです。もっとも、これだけでは何をもって実を結ぶ、とか、成長と言っているのか、いまひとつはつきりとしません。例えば有名なガラテヤ書5章の御霊の実、といったことがありますし、先ほど確認したコリント書では、やはり聖霊の賜物として、種々の働きと共に最も大きな賜物として、愛が語られていました。それら全部が、私たちの中で成長していく、というようにとらえてもよいでしょう。しかし、それだけではないはずです。むしろ、神様の国が、そして、私たち自身の中の信仰が、実際に実りを付けつつ、どこまでも成長していく、ということがここで言われているのです。そして、このような成長は、思いもよらないところから始まっているのです。今日の聖書では、最初に確認しましたように、コロサイの人々に福音を知らせたのは、エパfrasでした。7節にある通りです。最初は、何のことだか分らなかったはずです。しかし、エパfrasの語る言葉に耳を傾けたときから、この成長は始まっていた、とパウロは言うのです。

実を結ぶ

それと同じように、今、私たちは、この手紙を通して、福音、よい知らせ、希望の源、神様から与えられる平和を聞いています。そして、たとえ今、ピンと来なくても、大丈夫です。もう神様のお働きが始まっています。今一緒に聖書の言葉に聞いてくださっている皆様の中で、神様のお働きが始まっています。そして、それは時いたって、皆様の心の中で働いて、イエス様が一緒に居て下さることをわからせて下さり、それを全く確かなもの、確信へと成長させてくださいます。そして、そのような確信は希望を生み出し、希望は愛を生み出し、愛は行動になって表れていきます。このようにして、神様と共に歩む人の中で神様の力が働いていきます。

聞く人、成長する人

私たちが、このようにしてみ言葉に聞いていきます時に、この神様の業が私たち一人一人の中で始まります。私たちは、ただ聞いているだけのようでいて、それで終わらないのです。私たちは、福音の言葉を聞くときに、私たちの中で、神様の業が始まって、そして、私たちは、神様によって成長する人へと作り替えられていくのです。

祈り

父なる神様。あなたはこの世界の始まりに先立って、ただあなたの愛だけを根拠に私たちを御心のままにご自身のものとして選んでくださいましたことを感謝します。このあなたの愛に生かされて、この週の歩みにおいても私たちがあなたを賛美し、希望を持ち、愛に生きられますようお導き下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。